

## サッカーコーチの自分史

松本 光弘

はじめに

研究室の机の上のマットに筑波大学へ赴任したとき発行された身分証明書がはさんである。昭和53年2月1日付けのものである。数えると既に27年を過ぎていることになる。長かったようで無我夢中の日々、アツと言う間の期間であったようにも思える。

この間多くの先生方や事務の方、それにその間に会ったかけがいのない学生たち、中でも自分の実の兄以上にお世話になった森岡理右筑波大学名誉教授(前蹴球部部长)をはじめ同僚の山中邦夫、萩原武久両教授には心からこれまでのご交誼に感謝申し上げたい。

この度筑波大学最後の勤務の年にあたり何か紀要に投稿してほしいとの大熊廣明紀要委員会委員長の依頼に対し、承知しましたと気軽にこたえたのが年度始めであった。さて、このように原稿の締め切りを前にした今になって何を記すべきかと迷いながらも、紀要という出版物には似つかわしくないと思いながらも一度はまとめておきたいと思っていた2つの事柄がある。そのうちの一つをここに思いつくままに記させてもらうこととする。この2つの事柄とは、一つは自分の中にいろいろなものを取り入れるエネルギー供給の時期、いわゆる学習あるいは研修の側面、もう一つはその学習や研修したものを外に出すエネルギー消費の時期、いわゆるコーチングや教授の側面である。今回私が取り上げようとするのは前者の学習や研修の側面、いわゆる自分の中にエネルギーを供給した時期のことである。

何を、どこで、誰に、どのような内容を教わったのか？このことは私のこれまでにとって非常に大切なことである。それによって自分のコーチングや指導の方法や考え方に大きな影響を及ぼす可能性があるからである。丁度この原稿をまとめている時期に感性の定義に関する研究プロジェクトが人間総合科学研究感性認知脳科学専攻原田昭教授を中心にアンケート調査が出されている。

これまで私はサッカーのコーチはもとより、サッカーコーチの養成をも担当する時期があった。人が人を動かし、あるいは指導し、変えて行くという行為の中で、この「感性」という言葉が私が最も好むとともに、また非常に大切なものとして日頃から心に留めている言葉である。喜怒哀楽、すべてにおいてサッカー(スポーツ)は感性抜きにしては考えられないからである。

感性とは感受性、特に哲学で、時間・空間を根本形成とする対象の受容性。印象を受け入れる能力<岩波国語辞典>と表現されている。簡単に言えば感性とはその人が物事を感じる感じ方である。これは多くの部分を生来的なものに負うところ大であるが、またその人が生まれ育った環境によって作り上げられる部分も大きい。特に幼少年期の育った環境や過程が大きな部分を占めるようである。このことについてはソニー社長の大賀典雄氏とソフトバンク創業者の孫正義両氏の対談を元にした「感性の勝利」(経済界1996年出版)を読むとその裏づけが鮮明に記されている。また人は往々にして物事を習い始めた初期の段階に接した事柄や人物によってその事柄に対する感性が形成される場合が多いと考える。その感受性は物の見方や物事に接する態度やその人の物事に対する考え方や判断基準の形成に大きく影響し、その人のその後の行い方や生き方や判断基準の根本を形成することになるといっても過言ではない。

もしコーチングにコーチングの感性とかコーチングの哲学とかがあるとすればこの感性を磨いた時期、あるいはその感性を磨いた過程がその人のコーチング人生に非常に大きな影響を及ぼしていると私の拙い経験からいえるような気がしてならない。

この稿では自分がコーチとしての人生に入るまで、あるいは入ってから学習や研修の過程をたどることによって、自分自身のコーチングの根本を形成する事柄に関して回顧し、そこからコーチとしての条件や心構えなど自分が今一度これまで

のコーチ人生を振り返ってみることとしたい。あわせて各方面の体育・スポーツの指導活動に共通して通ずるものがないか、何らかの共通性を見出すことができないか、自分の反省を込めて模索したいと考えた次第である。また、この稿を見ていただいた方々には現在まで最高の幸運に恵まれた私のコーチ人生からほんのわずかでも何かを感じていただけたら幸いと思い、少し長文になるが改めて披露させていただく次第である。

#### 1人のサッカー指導者との出会い

我が恩師、福原黎三先生 <松本光弘著 麗和(浦和中学・浦和高校サッカー部史)1992年>

普段あまり本を読まない私の6年生になる末娘が久しぶりに熱心に本を読んでいて、どんな本かと思って尋ねてみると、先日学校で見にいった映画の元になった本で“飛べ！千羽づる”という広島で原爆にあった小学生の短い一生についてのものであった。私もどんなものかと思い書き出しを読んでみると何か心に引っ掛かるものがあり、またその本に引き込まれ、夢中で一気に最後まで読んでしまった。多分小学生の必読書になっているのであろう、そう難しいことが書いてあったわけではないのだが、その本で扱われていることが私にとって心に大切にしまっておいたものを呼び起こさせた。多分、人の一生にはこのような事がきつとあるに違いない。

その本で扱われていた原爆、放射能、第二次被爆、白血球、原爆手帳、これらの言葉に通じるのはやはり我が恩師、福原黎三先生のことである。広島に原爆が投下された時は昭和6年4月2日生まれの先生にとっては14歳の時で、その時先生は広島市から2~30km離れた八本松という田舎に住んでいたそうで、そのため直接原爆の被害には遭わなかったそうである。しかし、その翌日広島市内に住んでいた兄の公昭さんの消息を尋ねて被爆の跡地に足を踏み入れたそうだ。二日間の捜索の末やっと遺体となったお兄さんをハナワジマというところで捜し当てたという。この直接の被害には遭わなかったが、原爆が投下された直後に放射能が残る被爆の跡地にいった人を第二次被爆者というのだそうだ。娘が読んでいた本の主人公の佐々木禎子さんは福原先生よりもっと多くの放射能をあびていたようだが、同じ第二次被爆者であった。いずれにしろ二人とも原爆による放射能を

あび、“飛べ！千羽づる”の主人公は12歳の人生を既に終え、そして私の恩師福原黎三先生は昭和45年2月27日胃癌で38歳の短い一生を終えている。二人に共通すること、それは被爆である。

私の中には48歳を数えようとする今も数えきれないほど先生から受けた影響と思い出がいっぱい詰まっている。自分でも不思議に思えるほどである。一人の人間が他の人間にこれほどまで大きな影響力があることを知っただけでも私はこの人と出会えて良かったと思っている。

私が安行中学校から浦和高校に進んだのは昭和32年のことであった。やっとのことでの入学であった。安行はその頃片田舎で浦和高校への進学は冒険でしかなかった。ましてや組織だったスポーツ活動など行われてもいなかった。それが高校へ行ってからサッカーを始めることになるにはいくつかの理由があったが、一旦サッカー部に入ってサッカーを続けるにあたっては、福原黎三先生との出会いを抜きには考えられない。

先生が浦和高校に奉職したのは昭和31年4月のことで、私が高校に進む一年前のことであった。広島の鯉城高校からサッカーがやりたくて東京の大学を志望し、幾つかあった入学口から東京教育大学に進み、二次には関東大学サッカーリーグ戦で優勝している。160cmそこそこの先生がセンターフォワードのポジションで活躍されたとのことであるが、選手が大型化した現在では考えられないことである。先生の高校時代については私が接した方々からはあまり聞くことができなかったが、先生と同じ東京教育大学に進んだ私は先生の大学4年間のサッカーにかけた情熱や生活上のエピソードをいろいろな方からたくさん聞くことができた。

数えてみると私が出会った時先生は26歳であったはずだ。それから3年間、先生の年齢でいくと26、27、28歳このわずかな期間に私が先生から受けた感化はたいへんなものであった。いつも不思議に思えるのは、先生のこの年齢の時自分が受けた先生の感じと自分がその年齢の時の差である。行ったり、考えたりしていたことには少なくとも2、30歳のひらきがあったように思えてならない。先生の常日頃おっしゃっていたことが、今この歳になってやっとわかってきたようなことがたくさんある。その一つに“サッカーで哲学しろ”ということがあった。先生のおっしゃっていた意味と

現在自分が感じていることと一致しているかどうかは定かではないが、少なくともあの年齢でそれも高校生に向かってあのようなことを云っていた先生は自分なりに何か持っていたのだと思わずにいられない。

一例を挙げるならば、先生はよく“自由と規律”ということを言われていた。今、私が人を教える立場にいて、サッカーを通して何が教えられるかと考えた時、この“自由と規律”ということの大切さを感じている。サッカーには攻撃すなわち自チームがボールを持ったときと守備すなわちボールを失った時の二つの局面しかない。攻撃すなわち自チームがボールを持った時は自由にあらゆる手段を駆使して相手のあらゆる抵抗を乗り越えてゴールという最終目標に向かって邁進することが要求される。反対に守備すなわち自チームが一旦ボールを失ったら直ちに相手の前進を阻み、相手からボールを奪うためにみんな結束し、協力し、考えを一つにして行動しなければならない。そこには個人の自由はなく規律に支えられた全体行動がなければ到底ゴールを守り、ましてや相手ボールを奪うなどということはできない。この二面性を理解したチームが真のサッカーをやることができると思う。

私達の同級生は先生の影響かもしれないが現在もサッカーに携わっている者が多い。私事で申し訳ないが、同級生のなかで最も遅くサッカーを始め、自分ではあまりうまくはなかったと思っていた私が現在は大学のサッカーにあっては上位にランクされる筑波大に勤務し、サッカー協会の仕事をもう二十数年やらせてもらっている。その間にロンドンに移った伊藤康夫君とペルーのリマに移った竹嶋住夫君が協会の国際委員として活躍するようになった。いずれにしろ私たちもそう若くはない。今、2002年のワールドカップを目指して日本サッカー協会は動き出そうとしている。その時は何らかの形で日本のサッカーのために尽くしたいと希望している。先生の意志を継ぐとともに、浦和のサッカー、埼玉のサッカー、日本のサッカーの発展を願ってやまない。

“球心院一導居士”これが先生の戒名である。  
ご冥福をお祈りします。 合掌

この恩師、福原黎三先生に会ったことにより私の人生は決まると今になって迷うことなくいう

ことができる。もしこの先生に出会わなかったら私は高校を卒業してきっと土木関係の道に進んでいたと思う。それも特に土木関係に進みながら、そのころ読んだ本で感銘を受けたシュバイツワー博士のように外国に出てなにかしていたかも知れない。本文中にも記してあるが「サッカーで哲学しろ」先生のこの言葉に象徴されるように私のサッカーとの出会いとコーチングの哲学およびコーチングの感性の獲得は先生との出会いが原点であると言い切ることができる。

その後、この福原先生がどのような人間であったのか、そのことに極端に興味を惹かれたのかも知れない、私は先生の跡を辿るかのように東京教育大学体育学部に進学し、先生の同期の方々や福原先生と一緒に学生時代を過ごした方々からいろいろな話を伺うことができた。そのような先生に関する人物像を記録として残っているものを探すと矢張り先生が亡くなられたときの記念追悼号での同級生(昭和31年春に卒業)の先輩方の証言が私には感銘深くかつ的確に先生を表現していると感じられる。

サッカーに生きる <福原黎三君遺稿追悼集 故福原黎三君追悼事業会編 1970年>

“ ” 漢の高祖も秀吉も “ ”

東京教育大学サッカー部 同期生一同

昭和27年3月、雪まじりの教育大学体育館に緊張した表情で受験生が整列していた。地方から上京したわれわれは、冷え込みの寒さと不安とでちごまっていた。ふとみると、同じ受験生らしいが悠然としてあたりを睥睨し、落ち着きはらった男がいた。小柄だが日焼けした顔にぎょろりと大きな目、ひきしまった体躯に一分の隙もない構え……これは強敵、いや傑物がいるぞと思った。翌日昼休みにサッカー仲間が集まりボールを蹴った。その中に、彼の男がいた。その男こそ福原黎三だった。若くして散ったわれらの朋友に心から哀悼の意を表し、思い出をつづりたいと思う。

“名月赤城山” <川村好秋>

福原がキャプテンになった頃の教育大サッカー部は、40名を越える大世帯となり、自信に満ちた部に成長していた。部員が多ければ、多くの問題も派生する。その中には、レギュラーに希望の持てなくなった者や、経済的に合宿参加が心配される者などがいたが、人情味のある彼は、そんな人

ほど特に心を止めていた。そして理想的な部の在り方をめざして本当によく努力していた。マネージャーとしての私には、ともするとビジネスライクに物事を処理する傾向があったが、彼に正され、教えられることが多かった。豪放磊落のようで案外神経の細かさを持ち合わせており、それがサッカーの上にもプラスになっていたと思う。彼は広島島の男なのに、国定忠治をこよなく愛していた。私が上州人なので、よく「名月赤城山」をうたわされ、そして彼が身振りよろしく踊ったものだ。座ぶとんを背負い、物差しを腰に、障子をはずして舞台まで作る芸の細かさであった。二番を忘れると、自分でうたっては踊るその姿は、今でも昨日のように思い出される。洞察力の秀れた惜しい兄貴を失って残念至極だ。よく「お前はたるんだ」とぶんなぐられる夢を見た。しかしこれから二度と見られるだろうか。

“人生のリーダーとして” <畑山明>

われわれのキャプテンは、余りにも情熱を燃やしすぎた。あらゆる面に。サッカーの面で、同世代のわれわれは、彼のからだを通して技術を身につけたといっても過言ではない。スライディング・タックルの練習で、顔面蒼白になり、失神寸前まで続けようとしたあの気力、短身ながらヘディングの競り合いには決して負けなかったあのジャンプ力、ボールへの執着力、練習、試合に注ぐ集中力等、彼の全身からほとばしるエネルギーは、完全にわれわれをリードし魅了した。私は今でも彼の勇姿を思い浮かべるにつけ、彼をリーダーとしてプレイできたことを非常に幸せだと思っている。また人生の面においても良きリーダーであり、良き朋友であった。その彼をこんなに早くに失わなければならぬとは、何の報いだろうか。彼は、われわれの二日のエネルギーを一日で燃やしていたに違いない。

“巨砲通過” <鈴木勇作>

君のジャンプヘディングは「美」である。そのジャンプは、地球の引力から解放されているようであった。ボールを見つめて楽しく飛ばしている姿であった。ボールは君の額へ、君の額はボールへと空中でたがいに引きつけられていくようであった。そのヘディングの瞬間は、技術や体力などを超越した姿であった。その君のサッカーからは、生きるための「何か」が得られた。その「何か」は私の心から消えることはない。巨砲が通過

した直後のような真空状態の中で、ただそのことを考える。

“苦しみを耐えて” <小宮喜久>

あの精悍な顔、頑強な体内に、誰れ一人として想像すらしえない悩みを持ってボールを蹴っているのを知ったのは、入学後間もない大塚のグラウンドでの練習のときだった。突然プレーをやめたと思うと、彼の脈搏を検れと差しだした彼の首のそれは、ほとんど数えることのできないもので、「俺は心臓弁膜症と医者に云われている、注射器と薬を用意しているからもしもの時には頼む」と、それらの入ったケースをバックから取り出した。練習中、ときに腰をかかめることもあったが、大事にいたらなかった。甲府合宿最後の日にガラスで掌の甲を切り、腕を振りまわしたため出血が激しかった際は、疲労が相当重なっており心配だった。彼自身も「注射はあるか」とこのときばかりは深刻だったが、幸いアンプを切らずにすみ、彼と共に知り合った注射器を私は一度も使わずにすんだ。運動にとって致命的な心臓の病を克服し、日本を代表する選手にまでなった。その強く鍛えられた心臓が、最後にはかえって彼を長く苦しめることになったという。

新宿、よく歩いた街だ。夜ふけて帰ろうという段になると、「俺は泊まるぞお前ら帰れ」と一人反対の方向に歩いて行った。しかし翌朝の彼は、酔っ払ってはとうてい越えられそうにない堀の中、新宿御苑の緑にすがすがしい朝を目覚め、あるときは巢鴨駅に一番電車の轟音で、「漢の皇祖も秀吉もの」夢を破られるのだった。

“心に太陽を” <小池保雄>

福原君は先に逝ってしまった。まだ信じられない。彼が広島に帰ってからというものは大分いても随分心強かった。広島サッカーの将来をいつも口にし、サッカーで人間を作るという信念に燃えて普及にも情熱を傾けた君だった。学生時代、われわれ同級生はチームワークよく、コンパをたびたびもったが、君の平生口にしていた言葉は忘れられない。「心に太陽を、唇に歌を。」偉大な包容力の持主だった君には、随分励ましてもらった。練習が終わり新宿へ出ては、餃子の店で人生観などを話し合った。そのようなときは自然に足が君の下宿に向かい、肩を組み、放歌高吟しながら幡ヶ谷通りを潤歩したことを思い出す。また千葉の私の家にも来てくれて、賀茂鶴を宣伝したことが、

つい昨日のように思えてならない。あまりにも早く逝ってしまった。ただただ病魔を憎むのみである。

“学生教師” <横内允>

学生時代後半の二年間、福原君と私は、野球で有名な帝京商業の学生講師でもあった。専任がいなかったので、学生の彼は事実上の体育主任として実績を上げたものである。勉学、練習、試合の間を縫っての教師生活は決して楽ではなかったが、彼の情熱はここでも大いに発揮された。皆無に近かった体育施設も、数面のコート、サッカーゴール、マラソンコースとわずが半年位の間に作り上げ整備された。これも彼のひたむきな努力に負うところが大きかったし、また時間があれば職員室で先生方を集め体育の重要性を説いていた。巻尺を持って彼と二人で構内の空地を探し歩いたことが昨日のこのように思い出される。駅伝大会、全校体操をはじめ、生徒会作りにまで乗り出した彼の止まることのない情熱と実行力から学んだ点は大きい。駅伝の成功を祝って当日もらった安月給二人分を全部赤羽の町で飲んでしまった痛快な思い出、ゴールを守る私の前に、ピンチになると必ず捨て身のスライディングで倒れていた彼、人生に全力を尽くし、病床で、「やることはやった。悔いはない」と私に語ってくれたその言葉が耳について離れない。

“春を待ちつつ” <篠田昭八郎>

昨年11月広島駅の喫茶店で、コーヒーを飲みながら話をした。そのとき、過去のイメージとあまりにも異なりびっくりしたが、元気で何よりと思った。よもやま話はサッカーが中心で、春になったら岐阜に遊びに行き、A宅で一泊、B宅でと指折り数えて春の来るのを楽しみにしていた。危篤の報を一月に受け一瞬自分の耳を疑った。わずが三ヶ月であの元気だった彼がと。今アルバムをひもとき、広島駅で福原家御家族と一緒に写した写真を見ながら過去を思いだす。そして彼の姿が走馬燈のようにかけめぐる。良き友を失ない残念でならない。

“ ” 友よ安らかに “ ”

「漢の皇祖も秀吉も、天下とらなきゃ唯の人、まして凡夫の俺じゃもの、ボール蹴らなきゃ唯の人。君の気骨溢れる得意のたくましい声が聞こえてくる。歌ってくれブーよ。サッカーを愛し、ボールをいだいて天国に旅立ったブーよ安らかに眠り

給え。〔完〕

このような恩師福原黎三先生に出会い、私のサッカー人生は始まったわけである。この先生の生き様に接してきた私にとっては先生はサッカーにおける殉教者的側面を持っていたと強く感じている。ではこの福原先生のサッカーの殉教者的側面はどのようなところから芽生えてきたのであろうか。そこには先生自身のもって生まれたサッカーにかけける情熱や人間の素質がそうさせた部分があったことは十分感じ取れる。しかし、それにプラスして余りあるものはやはり東京高等師範学校から東京教育大学に受け継がれた伝統的教育者としての責任や情熱に負うところが大であると私は以前から強く感じている。

私は先生の進めもあり、全国大会で優勝できなかった悔しさも加わり、先生の後を追うように東京教育大学体育学部に進学することとなった。

東京教育大学体育学部への進学

そこで出会ったのが当時の蹴球部部長、体育学部健康学科健康管理学研究室教授阿部三亥先生であった。この先生は現筑波大学体育科学系教授阿部育雄先生（体育史）の実父でもある。この先生は温厚で私たち学生の前では普段はあまり口を開かない先生であった。しかし、いったんサッカーのことになると授業中であっても私たちに「昨日の試合は・・・云々」と話し始めて止まらないときがしばしばであった。

そのようなこともあり、筑波大学を終えようとする今の私の回顧の中で東京教育大学から名称は変わったがやはり筑波大学蹴球部のルーツを一度は省みなければならないという思いがある。大学時代の恩師阿部三亥先生は私が大学を卒業した昭和39年夏、東京オリンピックを目前にして亡くなっている。先生について先輩の竹内虎士先生は追悼号の中で次のように記している。

後語 <竹内虎士、阿部三亥先生追悼号 東京教育大学サッカー部誌 東京教育大学サッカー部編 昭和40年>

私は、我国のサッカーを盛大にするのに、主として教育系統を追って、サッカー不振の自己批判をし、小学校の生徒時代からサッカー人口を作るに、阿部個人の少年サッカーゲームの発展の構想

を述べた。しかし、これのみが唯一の道ではない。マスコミの力を借りることを考えなければならない。その為には、良い国際試合を見せることである。国内に強いチームを作って、それを外国の有数チームと試合をさせると、3万人の見物客が集まることは、昨年度後楽園で試験済みである。3万人集まると経済的には、自立出来る筈である。

自立する為には、よい試合にならねばならない。よい試合とは、外国のチームが強すぎて、点が開きすぎるといけない。サッカーファンは、自国チームの負けるのは嫌いである。

そのため、今の選抜チームよりプロチームを作った方が早道かもしれない。世界有数のプロチームを作れば、招待者即ちマーケットは、世界到るところにある。プロチームを作ると、サッカー協会の手から離れるが、本気にサッカーを愛好するなら、プロチームを作る援助を惜しんではならないと思う。プロサッカーが盛んになって、良いプレイヤーが高価にトレードされるようになれば、自然と強チームが出来るのである。

協会はあくまで前向きの姿勢で、前進して貰いたいものである。それは、やがて故阿部三亥教授の遺志に報ゆることになる。(後略)

注) 竹内虎士氏は大正15年体甲〔体〕、昭4研、昭9大〔教〕卒、元東京教育大学勤務。教大サッカー部長)

蹴球競技の宗家 <多和健雄> (茗溪サッカー百年 67~72頁 平成8年)

まえがき

『日本サッカーのあゆみ』(日本蹴球協会創立50年記念出版 日本蹴球協会編 講談社発行)の33ページに、「軍人を通してのフットボールは日本ではひろがらず、主として学校の先生から、学校の運動場で教えられたものが発達したのも日本の特徴の一つである。(中略)

学校の先生を養成するには師範学校が必要で、『師範学校』が昌平校の址にできたのは1872年(明治5)年、これが1886年(明治19)年に『高等師範学校』となり、1902年(明治35)年に『東京高等師範学校』となって、“わが国の蹴球競技の宗家”となった」とある。

宗家とは、本家とか家元とかいう意味であるが、いかなる意味で、東京高等師範学校が“蹴球競技の宗家”と呼ばれるに至ったのか。本稿はこのことを明らかにするのが目的である。

・東京高等師範学校の創立以前に、サッカーが行なわれていたという記録

#### 1. イギリスの海軍のダグラス少佐とフットボール

明治6年、日本海軍の指導に来たイギリス海軍のダグラス少佐とその部下の33名が、宿泊所にあてられた築地海軍兵学寮で、訓練の余暇に自分たちも楽しみ且つ日本人にも教えた。これが日本におけるサッカーの起源であるというのが定説となっている。

【解説】しかし彼らが約1年後に帰ってしまったあとに残されたのは、「異人さんは、蹴鞠(けまり)が好きだった」という語り草と、『フットボール』という呼び名だけで、この系統からサッカーは育たなかった。

2. 略

3. 略

#### 4. 高等師範学校とフットボール

明治19年4月、文部大臣は師範学校令を公布し、師範学校を高等・尋常の二つに分けること、高等師範学校は文部大臣の管理に属すること、高等師範学校は東京に一所、尋常師範学校は府県に各一所を設置すること、高等師範学校で養成すべき教員は原則として尋常師範学校長及び教員であるが時宜により各種の学校長及び教員に任ずることができると、などを規定した。これによって従来の東京師範学校は『高等師範学校』となった。

明治26年9月、嘉納治五郎が高等師範学校の校長になってから柔道が盛んになり、これにつられて他の運動に興味を持つ生徒が多くなったので、明治29年3月運動会が設立された。『運動会』は、柔道部・撃剣及び銃槍部・弓技部・器械体操及び相撲部・ローンテニス部・フットボール部・ベースボール部の7部からなり、生徒はその一部または数部に属し、30分以上必ず所属部の運動をすることが規定された。

明治34年10月、嘉納校長の提案により『校友会』が結成された。校友会には談話部会と運動部会の二部がおかれ、前者には談話部と雑誌部の二つの支部が、後者には柔道部・撃剣及び銃槍部・弓技部・器械体操部・ローンテニス部・フットボール部・ベースボール部・ボート部・自転車部・角力部が設けられた。(解説略)

・東京高等師範学校校友会蹴球部の普及活動

明治35年4月、『高等師範学校』は『東京高等

師範学校』と改称された。これは広島にも高等師範学校が新設されたからである。これにより『東京高師校友会フットボール部』が誕生した。

誕生したとはいっても、大塚に建設を始めた新校舎の竣工が遅れ、湯島の狭い運動場で旧態依然たる練習を繰り返すばかりであった。同年6月、欧米に出張していた坪井部長が帰国し、部員にフットボールに関する資料を貸し与え、新知識を吸収する援助をした。

同年9月、大塚の新校舎の内、寄宿舎の一部が竣工したので、1年生全員が湯島から大塚に移った。フットボール部の1年生8人は、朝、大塚の寄宿舎を出て湯島の本校に通い、放課後大塚に帰ると、運動場予定地にフットボール競技場を設定するための作業に従事した。同年10月、湯島以来恒例の運動会を大塚で開き、劈頭にフットボールのゲームを披露し、他校からの見学者に感動を与えた。

#### 1. 部員による、師範学校・中学校へ出張指導

明治36年4月から全員が大塚に移り、総部員20数名が練習に励んだ。ところが、試合を行う相手が見つからない。当時、正式にフットボールの試合が出来るチームは、横浜外人クラブと神戸外人クラブの二つだけであったので、明治36年12月、横浜外人クラブに試合を申込んだ。試合は、翌37年2月6日、2度目は明治38年1月28日、3度目は明治39年1月30日、その後も引き続き年中行事として行なわれるようになった。当時、日本人が外人チームと試合をすることなど皆無であったし、しかもフットボールという珍しい競技ということで、新聞が大々的に報道するようになった。それに触発されて、各地の中学校や師範学校から、嘉納校長にフットボールを指導して欲しいとの依頼が寄せられるようになった。明治38年から大正5年までに、部員が手分けをして指導に赴いた学校は、次の通りである。

青山師、愛知一中、愛知二中、茨城師、岡崎師、岡山師、岐阜師、群馬師、埼玉師、佐倉中、滋賀師、下妻中、庄内中、高田師、栃木師、豊島師、奈良師、姫路師、福島師、前橋中、水戸師、御影師、明倫中、盛岡師、山口師、山形師、山梨師、早稲田中

#### 2. 卒業生による、蹴球の普及活動

明治45年3月刊行の「校友会誌第32号」に掲載された「蹴球部報告」のなかに、『卒業生の状況』

として次の記事が見られる。「わが部はこの技の研究により自己の心身の修養に努むるのみでなく、進んで大いに是れを中等諸学校に伝え以て生徒の体育の指導者たらんことを目的としているから、卒業生は悉くこの主義をもって活動しつつある。」

卒業生の業績を具体的に書くことは紙数の関係で許されないので、竹内至著『日本蹴球外史』211頁に書かれた文を賛辞と受け止めて紹介したい。

「偶遇一人の指導者がいたとしても、それだけでは長続きしない。その意味からも、高等師範の卒業生が日本各地の中学校、師範学校に赴任したことは、底辺から積み上げて、蹴球の普及に大きな力となった。」

以上で、なぜ東京高師が“蹴球競技の宗家”と称えられるに至ったかが、明らかにされたと思う。要するに、日本の蹴球競技が普及してゆく初期の段階で、『部員による、師範学校・中学校へ出張指導』と『卒業生による、蹴球の普及活動』が活発に行われたことへの賛辞と受け止めてよいであろう。(後略) 〔完〕

#### 家からの巣立ち

東京教育大学に進学した私は1年生の時は兄弟が多かったこともあり経済的理由で川口市安行から茗荷谷の大塚校舎と幡ヶ谷の体育学部グラウンドの両方を移動しながら通学していた。朝、家を出るのは6時半、大塚の校舎で授業を受け、地下鉄丸の内線で新宿から京王線幡ヶ谷へ、そして練習をし、帰路は幡ヶ谷、新宿、池袋、赤羽、そしてバスで鳩ヶ谷、徒歩15分で帰宅。このような日々が1年間続いた。しかし、いかんせん自分が望むサッカーの練習時間がどうしても確保することができない。もっと練習したい、もっとうまく強くなりたいと思いながらも自宅からの通学では限界があった。思い切って母に何とか東京に部屋を借りて自炊するから出させてくれないかと相談してみた。母は「お前がそうするのが一番いいならそうしなさい」とこれが今思うと私の安行の実家からの巣立ちであった。それからの3年間はサッカーでは悔いを残すことがほとんどないくらいサッカーに打ち込めた。この間多くの友に恵まれ、先輩、後輩そして恩師、多くの方々にお世話になって今思うと充実した学生時代が送れた。

私が卒業したのは昭和39年春、東京オリンピックの年であった。卒業を前に私が所属した健康管

理学研究室では卒業記念スキーツアーが計画された。行き先は万座スキー場。研究室の教授であり、私たちの蹴球部の部長であった阿部三亥先生も一緒に同行された。私と蹴球部の主将であった杉田基之氏と2人が蹴球部の他の部員が石打の北辰寮で待っているため一足先に草津スキー場経由で長野原から渋川まわりで石打に行くことになった。このとき同級生と一緒に阿部先生も万座から草津の振り子沢の上まで見送りに来て下さった。このときが私が阿部三亥先生とご一緒した最後であった。その後阿部先生は胃がんが発見され、あっという間に病状が悪化し、同年7月9日、52歳の若さで、それも多方面から開催に力をそそぎ、サッカーの強化には特に尽力されていた東京オリンピックを見ずして他界されてしまった。もし先生がもう少し長く生きておられたら割合ざっくばらんにお話ができた先生と私の間柄であったのでいろいろなことを先生から学ぶことができたのではないかと残念でならない。

#### D・クラマー氏との出会い

東京オリンピック開催が決まってから最初の大会が1960年のローマオリンピックであった。残念ながらこのローマオリンピックには日本のサッカーは韓国に敗れ、チームを送ることができなかった。このことに危機感を感じた日本のサッカー界の重鎮はそのころ他のスポーツ種目では考えもしなかった外国人指導者の招聘を計画した。選ばれたのは当時の西ドイツ、デュイスブルグスポーツ学校主任コーチのデットマル・クラマー氏であった。昭和32年10月28日から12月18日までがクラマー氏が最初に日本に来た期間であった。私が丁度東京教育大学に入学した1年生のときである。確かこの最初の来日の11月であったと思う、クラマー氏が私たちの部活動を直接教えてくれるという好機に恵まれた。そのときのクラマー氏のデモンストレーションを駆使した指導は強烈な印象を私たちに与えた。その後もクラマー氏とは多くの機会に指導を受けることになるのであるが、それはまた後述することとなる。

そのときのもうひとつの驚きはクラマー氏の話すドイツ語を私たちに大変わかりやすい日本語に通訳して下さった方が私たちの先輩である成田十次郎先生（現筑波大学名誉教授、体育史）であった。この成田先生については私が高校時代福原先生から幾度となく話を聞かされていた。福原先生が学生時代、成田先生と幡ヶ谷寮で一緒だったとのことである。そしてよく議論したそうだが、福原先生が私たちによく言っていたことは文武両道、サッカーばかりでできたってだめだぞ、俺が大学の時には合宿に行くのにドイツ語の原書を持ってきた奴もいうんだ、お前もそれくらいにならなくてはいけない。そんな話の中で聞かされていた成田十次郎先生、私たちには全く理解できないクラマー氏のドイツ語の説明をいとも簡単に通訳されているのにただただ驚くばかりであった。私が福原先生から聞かされていた成田先生にお会いしたのはこのときがはじめてであった。それから11年後私がヨーロッパに研修に行くことになった折、成田先生からは多くのヨーロッパの先生方を紹介していただき、たくさんの成果を得て帰国することができたことも福原先生と成田先生のおかげであって叶ったことと今も感謝している。

デッドマル・クラマー氏が東京オリンピック（ベスト8）及びメキシコオリンピック（銅メダル、フェアプレートロフィー）でサッカーの日本代表チームの躍進に果たした役割は各方面で明らかにされているのであえてここでは記述しない。ここで取り上げるのはメキシコオリンピック終了後、FIFA（国際サッカー連盟）はクラマー氏を専任コーチとして採用し、アジアのサッカーレベル向上のためFIFA主催のアジアコーチングスクールを開催したことである。1969年第1回日本の千葉県東京大学検見川運動場、1971年第2回をマレーシアのクワラルンプール、1973年第3回をイランのテヘランで開催した。いずれも3ヶ月の日程で行われ、内容はほぼ同じであった。ここでは記録及び内容をいくつか紹介する。

まずデットマル・クラマー氏の略歴は以下のようである。

Dettmar CRAMER <体育時報臨時増刊号 No198 1970年>  
 1925年4月4日 西ドイツ国、デュイスブルグに生まれる  
 1946年 西ドイツ、ボルシア・ドルトムント・サッカーチーム選手



- 1949年 西ドイツ、ボルシア・ドルトムント・サッカーチーム・コーチ兼選手
- 1951年 西ドイツ蹴球協会コーチおよびデュイスブルグ体育学校主任コーチ（プロ）
- 1960年10月28日～1960年12月18日  
日本蹴球協会の招聘により来日、日本蹴球協会の機構整備ならびに技術指導計画確立に参画するとともに選手の競技力向上を指導
- 1963年10月～1963年12月  
財団法人日本体育協会東京オリンピック選手強化対策本部の招聘により蹴球競技コーチとして来日、日本選手の強化に尽瘁
- 1964年 西ドイツ蹴球協会ヘッドコーチ
- 1964年8月21日～1964年9月3日  
オリンピック東京大会日本蹴球競技候補選手団西独遠征中同選手団の強化指導
- 1964年9月4日～1964年10月24日  
財団法人日本体育協会東京オリンピック選手強化対策本部の招聘により来日、オリンピック蹴球選手団の強化に尽瘁
- 1967年 国際蹴球連盟コーチ
- 1967年6月1日～1967年6月30日  
国際蹴球連盟派遣アジア巡回コーチとして来日、わが国蹴球競技コーチの指導および選手の向上に努力
- 1968年7月13日～1968年8月17日  
メキシコ・オリンピック日本蹴球候補選手団欧州遠征の途次、西独滞在期間中同選手団の技術向上を指導
- 1968年10月5日～1968年10月25日  
メキシコにおけるわがオリンピック蹴球選手団に対し最終試合終了まで自ら進んで終始助言と指導を行った
- 1969年7月15日～1969年10月15日  
国際蹴球連盟主催、日本蹴球協会主管のアジア地域各国の代表的コーチを集めての第1回コーチ学校の主任コーチとして来日。このコーチ学校に参加のわがコーチ陣の指導はもとより、その激務のかたわら日本蹴球界の技術、コーチ組織その他につき助言と指導を行った

1969年千葉県検見川の東京大学検見川総合運動場で行われた第1回国際蹴球連盟主催アジアコーチング・スクール授業科目及び時間は以下のようである。

科 目	講習時間	試験時間
1. 実技		
a) サッカーの技術	50	3
b) サッカーの戦術	50	3
c) 身体適正	50	3
d) バレーボール、バスケットボール、 ハンドボール	20	3
e) サッカーの試合	22	-
2. 理論		
a) 戦術と作戦		
b) チームマネジメント	20	3
c) コーチング法	20	3

d) ルール	20	3
e) 組織と管理	20	3
f) 解剖学	10	3
g) 生理学	20	3
h) 救急法とマッサージ	20	3
i) 心理学	20	3
j) 教育学	20	3

### 3. 方法

a) 青少年のための模範指導	20	9
b) 大人のための模範指導	20	9
c) 試合の分析法	20	9
d) 模擬試験	10	3
e) 指導・組織に関する方法論	10	-

この検見川で行われた第1回アジアコーチングスクールを終えて日本サッカー協会(当時日本蹴球協会)は翌1970年(昭和45年)第1回日本サッカー協会コーチングスクールを同じく千葉県検見川で7月25日から8月24日の31日の期間で開催した。全国9地域サッカー協会から推薦された30名の受講者が集まった。福島大学にいた私は東北サッカー協会の推薦を受けての参加であった。このときの受講生にはのち清水市をサッカーの町として全国的に有名にし、盛り上げた堀田哲爾氏、現在も高校サッカー界でトップレベルを維持している長崎県立国見高校の小嶺忠敬先生など多くの優秀な人材が参加していた。

このときの授業科目及び時間は以下のようであった。

(1) 実技	70
サッカーの技術	20
サッカーの戦術	20
体力トレーニング	20
サッカーの試合	10
(2) 理論	80
戦術と作戦	10
チームの統率	4
コーチング法	10
競技規則	6
組織と運営	2
スポーツ医学	24
(生理、解剖、救急およびマッサージ)	
キネシオロジー	8
心理学	14

教育学	2
(3) 指導	22
少年への実技指導	6
青年への実技指導	6
講義の実習	10
レポートの実習	随時

### 指導者としての出発

私がこの第1回日本サッカー協会コーチングスクールに参加する2年前の昭和43年4月に福島大学教育学部助手として福島に赴任した。それまでは亜細亜大学で助手として給料をもらいながら中央線武蔵境から京王線幡ヶ谷まで通って東京教育大学蹴球部の後輩たちの面倒を見る役をおおせつかっていた。監督という名前をもらいながら教えるというより一緒に懸命に動き回り、率先垂範することで何とか後輩たちに納得して貰うという指導方法しか持ち合わせていなかったのが実状であった。それがこのコーチングスクールに参加することによってある点ではそれまでの自分の指導方針が間違っていなかったことを確かめながらも多くの点でもっともっと勉強しなければならないと痛感させられた。そんな折、私の後輩の宇野勝氏(現東海大学体育学部教授、サッカー部総監督)が西ドイツにサッカーの勉強に行くということになった。当時はまだ誰も本格的に海外にサッカーの勉強をしに行くことはなかった。たまたま宇野氏は恩師福原先生が私が浦和高校を卒業した2年後郷里の広島に戻り、広島大学付属高校の先生となったときの初めての生徒であった。彼もなぜか

福原先生に感化され、私と同じように福原先生の跡をなぞるなぞるよう東京教育大学体育学部に進学してきたのである。私も高校時代聞き、宇野氏も高校時代しょっちゅう聞かされたのは、「日本だけではだめだ、外国に行ってみよう」という先生の言葉であった。宇野氏もそうであったのかも知れないが私の心の中には外国特に本場ヨーロッパのサッカーが見たいという願望とも思える憧れが育っていたことは事実である。日本サッカー協会のコーチングスクールを受講してその気持ちはなおさら強くなった。宇野氏が行くなら私も行ってみたいと思うようになった。しかし、福島大学の授業や公務がありそう簡単に行けるはずはなかった。また、経済的にも当時1ドル360円、それも海外に持ち出せるのは2000ドルまでであった。航空運賃を調べると往復格安でも50万円した。そんなこんなで思いは果たせずにいたが、幸いなことに福島大学の先生方が夏休み休暇中に帰ってくるのであれば授業はやりくりしてくれるということになった。研修期間は6ヶ月、こうならなんとでも行こうと決め、またまた母に将来返金するのでヨーロッパ行きのお金をどうにかしてくれないかと無理を承知で頼んだ。母は黙ってすべてを受け入れてくれた。パンアメリカン航空の南回りりで1971年2月20日に羽田空港（当時成田空港はなかった）を出発し、フランクフルトに向かった。同じ飛行機に越路吹雪、内藤法美夫妻がいて立ち寄り空港毎に一緒に鈴を買いながら親しくしてもらい、ファーストクラスの席に何度か招いてもらったのも思い出の一つである。運の悪いことに私がヨーロッパに行った1971年は第1次オイルショックがあつて持っていった1ドル360円で買ったドル貨幣はいっきに240円の価値しかなくなってしまうという経験もした。

私は成田十次郎先生（当時東京教育大学体育学部助教授）と福島大学教育学部長菊地貴晴先生の紹介状でケルンスポーツ大学の聴講生として受け入れを許可されていた。あわせてケルンスポーツ大学に併設されていた西ドイツサッカー協会と同大学が連携して開設していたフットボール教師養成講座（現在の日本サッカー協会のS級コーチ養成コースに相当）の主任講師ヘネス・バイスパイラー先生の受講許可の手紙ももらうことができた。バイスパイラー先生はこのとき養成講座の主任でありながらブンデスリーグのトップクラスのチー

ム、ボルシア・メンヘングラントバハの監督でもあった。この実践と理論の結びついた先生の講義は言葉がほとんどわからないながらも私にとって大変興味深かった。今もそのような実践と理論が直結した指導ができればよいと思いながらいまだ果たせないでいる。また、後に筑波大学の客員教授として来られたゲロ・ビザンツ先生はその当時ケルンスポーツ大学のサッカー担当教官で、このフットボール教師養成講座の大学側の責任者として働いておられた。彼はその後西ドイツサッカー協会に移りフットボール教師養成講座の主任講師となっている。

このような経緯でヨーロッパに行くことになった私に、もうひとつの願ってもない話が持ち上がった。福島は冬季になるとスキーが野外スポーツの中心であった。私も学生に対するシーズンスポーツの実習指導の関係からスキーも担当し、指導員の資格を取得するまでになっていた。福島大学教育学部でスキーの指導員の先輩であった鈴木勝衛教授（当時先生は東京教育大学スキー実習の非常勤講師でもあった）がどうせヨーロッパに行くなればスキーも勉強して来い、とのアドバイスを受け、スキーにも大いに興味があったことも重なり、オーストリア国立スキー学校校長ステファン・クルッケンハウザー教授の訪問許可状まで頂くことになった。ヨーロッパでは宇野氏夫妻には大変お世話になった。宇野勝氏はさらに1年西ドイツに留まり翌年フットボール教師資格の試験に見事合格し、西ドイツサッカー協会公認のフットボール教師の日本人第1号となった。

私は6ヶ月の研修期間中、ケルンスポーツ大学のフットボール教師養成講座の聴講、ヘネフスポーツ学校での西ドイツサッカー協会A級およびB級コーチ養成コース参加、オーストリア、サン・クリストフ国立スキー学校でのインスブルック大学スキー実習への特別参加、ベネルクス3カ国の旅、フランスシャモニーからイタリアアチェルビアへの夏スキーの旅と可能な限り各地を見ることに努めた。そしてフットボール教師養成講座も終わりに近づき試験期間になったとき、できればサッカー発祥の地イングランドのコーチングコースに参加し、勉強したいと考え、主任講師のバイスパイラー先生にフットボール養成講座をぬける許可を願いでたところ快く承諾してくれた。イングランドサッカー協会（The FA）に照会状を出し

たが返事がなかなか来ず、これは行くしかないと思い、ケルンからドバー海峡をこえ、列車でロンドンに行った。直接ランカスターゲイトにあったイングランドサッカー協会のオフィスに行ったところ、手紙は受け取っている、明日からイングランド北部のダラムという町で初級と上級のコースが開催されるからそちらに参加するようにとの指示で、その日の夜、夜行列車に乗って北部の町ダラムに行った。

サッカーの本場イングランドでのコーチコース

このイングランドでのコーチングコースでの記録は、私にとってはたいへん参考になったので以下で紹介する。

Preliminary Course は 1 週間の同じコースが 2 回開催された。そこで第 1 回目のタイムテーブルのみをここでは紹介する。Qualifying Course は 2 週間が 1 コースであった。

PRELIMINARY COURSE TIME TABLE FIRST WEEK – 18th July – 24th July

DATE	SUBJECT
SUNDAY 18 <sup>th</sup> JULY 7:30	Students should arrive not earlier than 2:30 p.m. and not later than 6:00 p.m. Introduction to the course Group meetings
MONDAY 19 <sup>th</sup> JULY 9:15 – 10:30  11:00 – 12:00  2:00 – 3:30  3:30 – 4:30  6:30	Lecture: “The acquisition and development of skill” – R. Minshull The establishment of interest: (a) teaching techniques (b) organization The small-sided game as a basis for coaching. The coaching grid. The limitations of unopposed practice. The development of simple opposed practice. Controlled opposition. Group discussions – Organisation and preparation.
TUESDAY 20 <sup>th</sup> JULY 9:00 – 10:30 11:00 – 12:00 2:00 – 3:30 3:30 – 4:30 7:00 – 3:00	Coaching practice Dribbling – the encouragement of individual skill Shooting Tackling and zone defence Tutorial: “Principles of attack and defence”
WEDNESDAY 21 <sup>st</sup> JULY 9:00 – 10:30  11:00 – 12:00  2:00 – 3:30 3:30 – 4:30 6:30 – 8:00	Short passing techniques – interpassing possibilities – emphasis on the principles of play Setting up play – leading to through pass, will pass, cross-over movements etc. Pressure training – values and limitations Goalkeeping Lecture: “Laws of the game” by Mr. K. Ridden
THURSDAY 22 <sup>nd</sup> JULY 9:00 – 10:30 11:00 – 12:00 2:00 – 3:30 3:30 – 4:30 6:30 – 7:30	Coaching practice – Coaching in the game Long passing techniques – penetration possibilities Bringing the ball under control Heading in attack and defence Laws of the game examination
FRIDAY 23 <sup>rd</sup> JULY 9:00 – 10:30 11:00 – 12:00 2:30 – 5:00	Coaching in the game – conditioned games Revision Practical coaching examination

SATURDAY 24 <sup>th</sup> JULY 9:30 – 11:30 12:00	Theory of coaching examination Final discussion
--	--

## QUALIFYING COURSE TIME TABLE

Date	Subject
SUNDAY 18 <sup>th</sup> July 7.30	Introduction to the course Group meetings
MONDAY 19 <sup>th</sup> JULY 9.15-10.30 11.00-12.00 2.00-3.00 3.00-4.30 4.45-5.15	Lecture: "The acquisition and development of skill"- J. Jarman The development of technique-technical analysis " " " " " " The development of opposed practice Group discussions
TUESDAY 20 <sup>th</sup> JULY 9.00-10.30 11.00-12.00 2.00-3.00 3.00-4.30 4.45-5.15	Coaching practice-prepared topics The use of small-sided games in coaching Coaching practice-prepared topics Coaching in the game Group discussion
WEDNESDAY 21 <sup>st</sup> JULY 9.00-10.30 11.00-12.00 2.00-3.00 3.00-4.30 4.30-5.15 7.00-8.30	Coaching practice-prepared topics Functional practice. Goalkeeper (I) " " " " (II) Functional practice. Rear defenders (a) covering responsibilities. (b) tight marking responsibilities Coaching in the game Seminar: "Principles of attack and defence"
THURSDAY 22 <sup>nd</sup> JULY 9.00-10.30 11.00-12.00 2.00-3.00 3.00-4.30 4.30-5.15 7.00-8.30	Coaching practice-prepared topics Functional practice. Central defenders Pressure training developed realistically Approach play to create shooting positions Coaching in the game Group discussions
FRIDAY 23 <sup>rd</sup> JULY 9.00-10.30 11.00-12.00 2.00-3.00 3.30-4.30 4.30-5.15 7.00	Coaching practice-prepared topics Functional practice. Mid-field players (I): (a) defensive responsibilities; (b) zone defence systems Functional practice. Mid-field players (II) The development from functional to phase practice Analysing a game from a coaching point of view Group discussions
SATURDAY 24 <sup>th</sup> JULY 9.00-10.30	Coaching practice-prepared topics

11.00-12.00	Tactics at re-starts: (a) corner; (b) throw-in
2.00-3.30	“ “ “ (a) free-kicks; (b) goal-kicks; (c) kick-off
3.30-4.30	Functional practice-central attackers
4.30-5.15	Group discussions
7.00	Lecture: “Modern tactical developments”- R.Minshull
SUNDAY	
25 <sup>th</sup> JULY	
9.15-10.30	Coaching practice prepared topics
11.00-12.00	“ “ “
2.00-3.30	“ “ “
3.30-5.00	Group discussions
MONDAY	
26 <sup>th</sup> JULY	
9.00-10.30	Coaching practice-prepared topics
11.00-12.00	The organization of combined play in attack
2.00-3.30	Functional practice. Wing play
3.30-4.30	Interchange of function. Mid-field players as the springboard for encircling movements
4.30-5.15	Group discussions
TUESDAY	
27 <sup>th</sup> JULY	
9.00-10.30	Coaching practice-prepared topics
11.00-12.00	Dribbling and the development of individual skill as a functional problem
2.00-3.30	Tactics in attack (I)
3.30-5.15	“ “ “ (II)
7.00	Group discussions
WEDNESDAY	
28 <sup>th</sup> JULY	
9.00-10.30	Coaching practice-prepared topics
11.00-12.00	“ “ “
2.00-3.00	Tactics in defence (I)
3.30-5.15	“ “ “ (II)
7.00	Group discussion- “Theory of coaching”
THURSDAY	
29 <sup>th</sup> JULY	
10.00-12.00	Practical coaching examinations
2.00-5.00	“ “ “
FRIDAY	
30 <sup>th</sup> JULY	
10.00-12.00	Theory of coaching examination
12.00	Final discussion

コースの中で学んだいろいろなことを帰国後パンフレットにして各方面に配布した内容が以下のようなものであった。

“ ” ENGLAND COACHING COURSE より “ ”

1971年 ENGLAND 北部の DURHAM で行なわれた F.A.の SUMMER COURSE (PRELIMINARY AWARD COURSE) に参加した際の内容の一部である。

この COURSE は Junior を対象とした指導者養成

が中心で内容もそれにそったものである。

コーチとしての仕事において重要ないくつかの性質と能力についての考え

コーチとしての能力

- (a) 訓練すべき課題にうまく取り組む能力
- (b) 練習場面を創造する能力
- (c) 熱情を喚起する能力
- (d) 結果を正しく把握する能力
- (e) 見て理解する能力
- (f) プレーヤーのレベルを見極める能力

コーチとしてのパーソナリティー

- (a) 声と表現力
- (b) 誠実であること
- (c) 独立心と先導力
- (d) 熱心であること
- (e) 他人の気をそらさないこと・同情・配慮
- (f) 信頼できること

コーチとしての知識

- (a) 主題に対する知識
- (b) プレーヤーの身体的能力と限界についての知識と理解
- (c) コーチングの時間の配分と立案する能力
- (d) 自分でデモンストレーションできる能力
- (e) 活動を関連づける能力

コーチの方法は大部分コーチャーの個性に依存する。しかし、基礎的枠組みはすべてのコーチャーに共通であることを認識しなければならない。コーチをするためにはきちんとした手順が必要である。

1. 準備
2. 提示
3. 関連 - 以前の知識に新しい考えを関連づけること。
4. 適応 - 試合に対して
5. 総括

コーチング・グリッド

ジュニアクラスのトップやセカンダリークラスのコーチング計画の一部としてグリッド使用のいくつかのセッション。

グリッドはグラウンド上に 10 ヤード四方に線で区切った地域をいう。これは形や大きさがいろいろに限定された地域での技術練習に用いられ、形や大きさはプレーヤーに対する要求度によって増したり減らしたりされる。

どのようなゲームのコーチにおいても 2 つの大きな目標は

- a) 技術を向上させる。
- b) 理解を深めること。

サッカーを教える際、攻撃（厚み、拡がり、活動性、スピード、突破）と守備（厚み、カバー、集中、遅らせること）の原則を強調して教えるために多くの時間ゲームに費やされなければならない。

これを教えるにはフルゲームを行なうことで

きよう。しかし、少人数に分けられたチームゲームでは各々のプレーヤーが自分が攻撃側にいるか守備側にいるかの判断をしなければならない機会が非常に多くなる。

コーチング・グリッドを使うことにより、敵対した練習場面を立案することができ、そして、それはプレーの原則とゲーム展開の両方を体験させる環境を与えることになる。

グリッドを使った練習の例

ボールを保持しつづける 3 対 3

拡がりと援助の重要性

良いパスの機会を味方に作り出してやること。

1 人の敵を打ち負かす方法を説明するための 2 対 1

正しいパスの性質、方向の正確さ・タイミング・ボールの強さ・見せかけ

攻撃と守備両方に特定の目的や目標を常に与える。

ゴールをおとし入れること。

ラインを攻撃すること。

パスの回数を数えること。

グリッドを使った練習では、ヤングプレーヤーの場合テクニックはしばしば行き詰まる。しかしながら、敵対した練習はそのテクニックがどのように改善されなければならないかを暗に示す助けとなる。

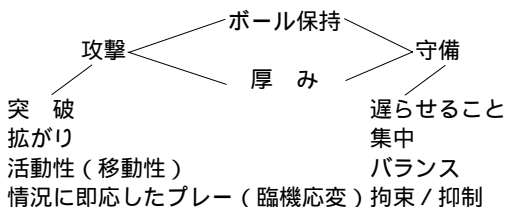
2 対 1 - ボールコントロールを練習するためにボールの配給をいろいろかえながら。

3 対 1 - ヘディングやボレーパスなどを含めたいろいろな攻撃の可能性を教えるためにスローインを使う。

2 対 1 - マンツーマンマーキング、スクリーニングやドリブリングやタックリングをする機会を増す。

指導内容要目

(A) 攻撃と守備の諸原則



この要目は全て、攻撃と守備の諸原則、並びにグループ及びチームプレーにおけるその適用と関係する。チームプレーの学習は、主として、少人数のサイドに分けたゲームで行われる。

#### (B) パッシング

いろいろなパスの技術が盛りこまれるが、各々分離したこまかいところよりもむしろ技術の遂行を決定する一般原則に指導は集中するだろう。

- ( ) 良いパスの諸性質 - タイミング、ボールの強さ、方向の正確さ、見せかけ
- ( ) パスの角度 - ボールを持っている者の動きと、良いパスの角度をつくる際のボールを持たぬ者の動き
- ( ) 空地をつくること - パスを出したり、パスを受けるために、あらゆる技術は、敵が居るという状況で行なわれ、指導される。
- ( ) ボールの保持 - 厚みと援助、援助するための良い角度と距離、プレーの組み立て。
- ( ) ブラインドサイドポジション - パスを出す者と受ける者の位置からみた・・・。
- ( ) 突破 - スルーパス、壁パス、リバースパス、オーバーラッピング等
- ( ) ロングパスとショートパス - ロングパス、ショートパスを使った足許へのパスと空地へのパス。
- ( ) 条件つきゲーム - 膝から下にパスをする。パスしてフォローする。敵を引きつけてパスをする。ツータッチで行うフットボール等

#### (C) ボールコントロールとストップイング

- ( ) 技術の諸原則 - ボールがとぶ線に位置すること。コントロールする面をリラックスする。コントロールする面を引く。コントロールして次の動きに入る。
- ( ) コントローリングとターニング - パスしたり、ボールを保持したり、ボールと敵の間に身体を入れたりするために。

コントローリング、ストップイング、トラッピングに関する各技術はデモンストレーションされるが、各技術を深くつっこむ時間は望めそうにない。

各技術は熟練をする実践場面とりわけ敵と対した練習に結びついていることが重要である。

技術は決してそれ自体が目的ではなく、目的に到達するための手段であるにすぎない。

- (D) ボールを保持して走ることとドリブリング
- ( ) ボールを持って敵を攻撃する - 何処で、

何時そうすべきか、緩急を変える。

- ( ) ボールの上やまたぐ各種フェイントプレー。
- ( ) 敵にボールを見せること - 敵にタックルさせ、バランスをくずす。  
タックルからボールを引き離す。
- ( ) 相手と密着してのコントロール - ボールをキープし続けること、密着した状況においてすばやく方向転換すること。
- ( ) ドリブリングやボールを持つてのターニングの際周囲の状況を見ることを養う。見せかけとあざむくこと。  
- 敵をあざむくために眼を用いる - 敵をあざむくために身体の動きを用いる。
- ( ) 条件つきゲーム - 1人の相手をドリブルで抜きパスする。ボールに10回タッチする。ボールを受けて相手との間に身体を入れる。

#### (E) タックリング

- ( ) タックリングの諸条件 - 幅広く、重心を低く、ボールに対してというよりボールを通り抜けて力に対してタックルする(深いタックル)。相手に近づくタイミング、タックルする足とタックルしない足の位置、安全のための諸要素
- ( ) タックルする時期 - 守備における厚み、連携した挑戦、あやつることと相手に悪いパスの角度を押しつけること。タックルするために相手のパスをおびき出すこと。
- ( ) タックルする場所 - フィールド内の安全な地域、安全でない地域。
- ( ) 敵をマークすること。

#### (F) シューティング

- ( ) キッキングの諸原則の分析と適用 - 速さを得るための小さい振り、強さを得るための大きな振り、ボレーや回転してのシュートの際足の位置が変わることに関連しての身体の位置。
- ( ) シュートの角度 - ゴール守備の技術の分析、シュートの角度をせざる。  
回転してのシューティング。
- ( ) シュートする位置 - シュートする位置の適切な読みの分析、逆サイドからのパスから。ゴールライン方向からのパスから。回転したときのシューティング、倒れながらのシュート。



- ( ) 固い守備体制に対する突破 - 空地を作るために拡がりを持つ。
- ( ) 実践的プレッシャー・トレーニング
- ( ) シューティングを向上させるための試合形式の活動
- (G) ヘディング  
次の二点を支配するヘディング技術の諸原則
- ( ) 正確さ
- ( ) 強さ  
スタンディング・ヘッドとジャンピングヘッドに対して  
ヘディングするために高くジャンプすることも含めてのヘディング技術の諸原則  
ヘディングでクリアーするためのポジショナルプレー - 守備  
ゴールヘディングでシュートするためのポジショナルプレー - 攻撃  
ヘディング技術を向上させるための試合形式の活動
- (H) ゴールキーピング  
ボールコントロールの原則と関連させてのゴールキーピングの諸原則 ((C) 参照)  
ゴールキーピングの諸技術 - 分析
- ( ) ゴールキーパーのポジショナルプレー - シューティングの角度をせばめること。アタッカーの精神の集中を乱すためのフェイントイング  
ポスト近くのポジション  
ポストから離れてのポジション  
ボールにおおいかぶさること、そして敵の足許へのダイビング  
味方へのボールパス - 攻撃の諸原則  
- ショートキックとショートスローイング  
ゴールキーパーとしてプレーに直接影響するところルール上で認められている任務  
実践的プレッシャートレーニング
- (I) 試合再開・リスタート  
- ロングキックとロングスローイング  
キック・オフ、コーナーキック、ゴールキック、フリーキック（直接と間接）及びスローインを含む全ての試合再開におけるポジショナルプレー  
試合再開は局部的というよりプレー全体の原則との関係で扱われる。  
マーキングやカバーリングや空地を作ることをつかさどる諸要因は試合再開における戦術と関連
- させて再度強調される。
- (J) 指導と組織の方法  
指導の方法は形式的な方法で扱われることもあるし、扱われないこともある。  
形式にのっとって扱われる場合、コーチには次のことが要求される。
- ( ) プレーヤーを援助するために1グループ又は数グループに対してコーチするときの立つ位置。  
- 実技を観察するために。  
- 練習の際の妨害をさけるために。  
- 声をかけるために。  
- すみやかに、かつ容易に1グループ又は数グループを統率するために。
- ( ) 興味を持たせるための言葉や声の使用(言葉はプレーヤー達が求めている事に関連してのみ有益である。)  
- 声の乱用は本来危険が備わっている。
- ( ) デモンストレーションの効用と誤用 - 充分準備されたデモンストレーションの必要性
- ( ) グループや組を管理するのに有用である方法  
- 賞賛と批判の利用  
- 機知とユーモアの効用と誤用
- ( ) 練習並びに指導グループの組織  
- 指導時限の細部にわたる立案準備の必要性  
- 立案準備法
- (K) 初歩的戦術
- ( ) ポジションと役割の分析 - 攻撃と守備の諸原則
- ( ) 戦術に適応するための基礎となるボール保持
- ( ) (ゴールキーパーを含めた)バック、ミドルフィールド、フォワードそれぞれのプレーヤーの義務と責任
- ( ) ポジション交換と責任 <福島大学教育学部 松本光弘> 【完】
- 以上のようなことが指導の中心となって展開された。現在ではスポーツの指導用具としてあたりまえのように普及している“ピブス”と“コーン”はこの時の講習会で使用されていたものを帰国してから全国のサッカーの指導者に紹介し、ピブスはアシックス(株)に特別注文で製造・販売し

てもらい現在のように体育・スポーツ各方面に普及するに至った。コーンについては道路工事現場に行き、その購入先を尋ね、購入した覚えがある。そのころは比較的高価であり、あまり多くの数は購入することができなかったことを記憶している。

何はともあれイングランドに 20 日間ほど滞在し、西ドイツケルンに帰った。それからわずかの間ケルンに滞在し、再びパンアメリカン航空の南回りで日本に向かって帰路についた。この間パリに 3 日、ローマに 2 日滞在し、できる限り多くのものを見ようとルーブル博物館やローマの街中を足を棒のようにして歩き回ったことが思い出される。そんなヨーロッパの旅の中でタクシーに乗って料金を騙されたり、私の方から道を尋ねて案内してもらった紳士風の人からガイド料を請求されたり多くの苦い経験もした。

このような形で実現した私の指導者としてのバックボーンとなった本場ヨーロッパの研修は自分なりに納得のいくものであった。多くの人達に協力して頂いてのヨーロッパ行きであったため帰国してからはそれまで以上に大学や県や地域の仕事に頑張れた。

#### FIFA アジアコーチングスクール・テヘラン

その後、昭和 48 年 9 月 3 日付けで日本蹴球協会会長野津 謙氏から福島大学教育学部長宛に以下のような文書が届けられた。

第 3 回 FIFA コーチングスクール受講生推薦の件 拝啓 時下益々御清栄の段お慶び申し上げます。

平素本協会に対しましては、格別な御理解御協力を賜りまして有難く、御礼申し上げます。さて今般イラン国テヘラン市において標記コーチングスクールが下記により開催されることになりました。

つきましては、本協会では日本サッカー界将来の中心的指導者として期待される人材を推薦すべく審議の結果 貴学 松本光弘氏 をアジア蹴球連盟に推薦致したく存じます。

時節柄御多忙の折かと存じますが、本協会の意図するところを御理解賜わり、同氏の派遣に格別の御配慮をお願い申し上げます。 敬具

記

#### 1 .名称 第 3 回 F.I.F.A(世界蹴球連盟)コーチングスクール

(3rd F.I.F.A Coaching School for Asia 1973)

- 2 .主催 F.I.F.A (世界蹴球連盟)  
A.F.C (アジア蹴球連盟)
- 3 .期間 昭和 48 年 10 月 1 日 ~ 12 月 31 日
- 4 .開催地 イラン (テヘラン市)
- 5 .経費 片道航空料金 (東京 テヘラン) 及び滞在雑費は個人負担  
片道航料金 (テヘランー東京) 日本蹴球協会負担

滞在費はイラン協会負担 以上

このような次第でまたまた福島大学の先生方にいろいろな面でご迷惑をかけながら当時既に日本の近代サッカーの父と呼ばれるようになっていたデットマール・クラマー氏が主任講師を勤める FIFA 主催第 3 回アジアコーチングスクール(これが最後の開催となった)に参加することとなった。この FIFA 主催アジアコーチングスクールは 3 回行われたわけであるが、その期間及び内容はほとんど同じで、前述した第 1 回目の 1969 年日本の千葉県検見川で行われたものと同様の内容であった。ここでそれぞれのコーチングスクールに日本から参加した人のリストを挙げておく。現在も一線で活躍している方がたくさんいる。

#### 第 1 回 F.I.F.A Coaching School for Asia 1969

(日本 千葉検見川)

石井義信 上田亮三郎 大橋謙三 折出成生  
加茂周 清水泰男 鈴木嘉三 長池実 中村  
義善 西垣成美 畑山正 松田輝幸 吉田達  
法

#### 第 2 回 F.I.F.A Coaching School for Asia 1971

(マレーシア クワラルンプール)

鎌田光夫 田村 脩 松本育夫 山中邦夫  
山成宣彦

#### 第 3 回 F.I.F.A Coaching School for Asia 1973

(イラン テヘラン)

相川亮一 松本光弘

この 3 ヶ月間はまさしくサッカー漬けであった。あまり得意でない語学に連日の暑さの中での実技、金曜日の休み (イスラム世界では金曜日が休日) の大切さをつくづく身にしみて感じた。スクールが始まった 10 月はたいへん暑く 38 度くらいあったテヘランの気候もスクール終了間際の 12 月末には 20cm も雪が積もる気候であった。何とか最後の試験にも合格し、認定書をもって帰ることができた。以下はスクール最後の日の日記である。  
12 月 30 日 Sunday Snow

avodie はすっかり雪に覆われてた。私たちの 3 ヶ月の Football 生活も今日でおしまい。

自分たちの能力の Best をつくしたと考えよう。そして、また、明日から新しい出発をするのだ。この 3 ヶ月が Football のみならず自分のこれからの人生に大きな意義があることを祈る。この 3 ヶ月の生活をするために協力してくれた全ての人に深く感謝の意をささげる。Aki、Yohko 私はこれからお前達のもとへかえる。そして、これまで以上の意義ある生活ができるよう頑張ろう。この 3 ヶ月でお前達の先に立って歩いて行く自分を作り上げたつもりだ。今、自分の首にある飾りも神に対する感謝の意味を含めて Aki に送ろう。この部屋からの ground を通しての街の景色も今は暗い。Mr.CRAMER ももうここにはいない。さよなら、私の机よ、Bed よ、そしてこの部屋よ。機会があればまたおとずれよう。

Koh der Face!!

クラマー氏との本格的なお付き合いはこのときから始まった。彼の率先垂範の指導姿勢には何度会っても頭が下がるばかりである。

Das Auge an sich ist blind,

目それ自体はものを見ることはできない

Das Ohr an sich ist taub,

耳それ自体はものを聞くことはできない

Es ist Geist, der sieht,

ものを見るのは心であり

Es ist der Geist, der hört ,

ものを聞くのも心である

(日本サッカーのあゆみ 日本蹴球協会編 245 頁 1974 年)

これは日本蹴球協会(当時)の会長であった医学博士野津 謙氏が 1960 年デットマール・クラマー氏に日本のサッカーを託すかどうかを決めるために初めて西ドイツ、デュースブルグスポーツ学校のクラマー氏の部屋に案内されたときに壁にかけられていた額に記されていたものだそう。これを見た野津会長はこの人であれば日本のサッカーを任せてもよいとクラマー氏に直接会う前に確信したそうである。この話は事あるごとに野津会長が私たちに話されていたことである。

このテヘランでのコーチングスクール以後クラマー氏とお付き合いする中で、彼が書き残した格言のような語録で私にとって特に印象深いものをいくつか挙げておく。

DAS LEBEN IST LESEN WERT.

人生は生きるに値するものだ。

ES GIBT NICHTS GUTES AUSSER ; MAN TUTES !

実行にまさるものはなし。

DIE KRAFT WACHST AM WIDERSTAND.

力は障害に出会って大きくなる。

VEILE KLEINGKEITEN MACHEN DIE VOLLOMMENHEIT.

たくさんのささいなことが完璧を作るのだ。

OHNE DEN RECHTEN ERNST GELINGT NICHTS AUF DIESER WELT.

本気にならなければ、この世の中では何事もうまく行かない。

第 3 回の FIFA 主催アジアコーチングスクール受講という経緯を経て、1974 年から日本サッカー協会のコーチングスクールをお手伝いするようになった。その後、フィリピンのマニラで行われた FIFA 主催の研修会や各種世界大会の視察、公認指導者の海外研修、外国人指導者を招聘しての研修会など多くの学ぶ機会に恵まれた。なんといっても私のコーチングの感性あるいは哲学ともいえるものは高校時代からテヘランまでにほとんどの部分が創られたといっても過言ではない。

総括(筑波大学への道程)

最後を締めくくる意味で筑波大学蹴球部創部 100 周年を記念して刊行された記念誌に掲載した拙文を記し、まとめとさせていただきます。終わりとしたい。

“ 監督雑感 ” 昭和 40~42 年 / 53~61 / 平成 3~6 年度監督 松本光弘

< 茗溪サッカー百年 筑波大学蹴球部編 26-31 頁 1996 年 >

私は過ぎ去ったことを云々することはあまり好みません。いろいろ理由はあるのですが、強いて一つ挙げるといわれたら、サッカーは常にこれから起こるであろう事象に対して行動しなければならぬスポーツで、過去にあまりとらわれていると先に進むのが鈍るのように感じるからです。現在及び未来のパフォーマンスは過去のトレーニングや経験の積み上げの上に築かれることは重々知りながらも、できる限り眼は未来に向けたいというのが私の個人的な望みです。又、いつもそのような気持ちを 50 代を過ぎた現在の私の年令になっ

ても持たせてくれるのは、毎年3月になると、もっと一緒にサッカーやその他のことをしたいと思いつながりながら送り出さなければならぬ卒業生、そして、初対面の時はどうしてもある種の構えをもって迎えるのが常となりつつある4月に入学してくる新入生、彼らはいつもおおむね18才から22才の若さの青年です。そのような彼らはいつとも希望に満ち溢れています。そんな彼らといつとも一緒にいられることがこのような気持ちを持ち続けることができる源泉だと思っています。温故知新、この言葉ほど意味が深く、科学性をあらわす言葉はないと思っています。科学に縁のない内容になりますが、今回はあえて私の思い出(温故)を記させていただきます。

<安行中学校から浦和高校へ>

私の生まれたところは安行といって、現在では首都高速が小菅を過ぎて東北道へつながるほんの手前にある安行ランプを下りたところです。私が過ごした小、中学校の頃はまったくの陸の孤島で小学校1年生から中学校3年生までまったく変わらない同じ同級生で各学年2学級(私の時はベビーブームで3学級)でした。高校受験にあたって「お前は無理だから止めておけ」と担任の先生に言われ、なにくそと思い、受験したのが県立浦和高校でした。幸運にも、まさしく幸運にも合格し、せっかく浦和に来たからには何かやろうと思いつ、兄が浦和に在学していた時、全国高等学校選手権大会の決勝戦で優勝した模様(私が浦和に入学したとき同時に同校に赴任された倉持守三郎先生が優勝メンバーにいた)をラジオで聞いたのが心に残っていて、どうせやるなら全国的なサッカー部に入ろうと思いつ5月の連休明けにグラウンドに行ったのが、私と茗溪との出会いでした。

<浦和高校での茗溪(福原黎三先生)との出会い>

サッカーのサの字も知らない安行の片田舎からきた私を迎えて下さったのは私の生涯の恩師、茗溪の大先輩の福原黎三先生でした。先生の何かに惹かれ、サッカーに夢中になった高校3年間でした。この間先生からは色々なことを学びました。「サッカーで哲学しろ」、「何にでも良いから殉教者になれ」、「全力を尽くせ」。高校からサッカーを始めた私にとってはすべてが新鮮で、もしお前の人生の基礎は、と尋ねられたら、即座に高校時代のサッカーと答えます。2年生の時やっとの思いで埼玉代表の座を勝ちとった正月の全国高等学校

サッカー選手権大会では私のマークしたレフトウイングに勝ち越し点を入れられてあえなく初戦の2回戦で島原商業高校に1対2で敗れました。3年生の時は埼玉で勝てば全国優勝といわれながら春の学徒大会で当時浦和高校の先輩の松本暁司先生(私がラジオで聞いた優勝チームのゴールキーパー)率いる市立浦和高校に延長再試合これ又延長で劇的なゴールキーパー島村のフリーキックからの得点で勝ち、優勝しました。夏の甲府での関東大会では再延長で決着がつかず両校優勝、そして国民体育大会埼玉予選、全国高等学校選手権埼玉予選の両大会とも決勝で相対した市立浦和高校に無念の敗戦を喫し、恩師福原先生を胸上げできませんでした。当時の各方面の評価通り市立浦和高校は正月の全国大会を制覇しました。

<浦和高校から東京教育大学へ>

福原先生の教えをなぞるように、これ又幸運にも東京教育大学体育学部に入学できました。そこでお世話になったのは当時の部長故阿部三亥先生、監督の太田鐵男先生、それに福原先生の同級生で今もなおお世話になっている当時のコーチであった小宮喜久先生(現順天堂大学教授、サッカー部長、日本サッカー協会理事)でした。この大学4年間も私にとっては多くのことを学ばせて頂いた時期でした。1年目は安行の自宅を朝6時半に出て、大塚で授業を受け、そして幡ヶ谷へ行き、練習をして安行の自宅に帰るのは毎日夜9時半から10時でした。そんな毎日でサッカーを練習する時間もままならず、兄弟の多い私の家庭では無理と思いつながらも母に頼み込み笹塚に3帖間を借りて安行を後にしました。今思えばあぶなっかしい私の巣立ちだったことになります。そして、3年生になる時、やぶからぼうに突然訪問して頼み込んで、学生はダメだというアパート所有の材木屋さんの社長さんに執拗にねばって入居を許可してもらい、同級生の金村勲氏(現在山形県立村上北高校教頭)と2年間生活したのがグラウンドの真上の第二みどり荘の6帖間でした。この間いろいろなことがありました。また、いろいろなことを学びました。今考えてみると何でもが新鮮に感じるそれほど無知な田舎者だったようです。1年次のキャプテンは浦和高校の先輩篠崎一男先生、2年次は早死にしてしまった心のやさしかった山本一郎(茂晴)氏、3年次は面倒見がこの上なく良かった今西和夫氏(現サンフレッチェ広島総監督)

それに私の代のキャプテンは当時初来日だったデットマール・クラマーの示した頭でのボールリフティングをなんなくやっけてのけた杉田基之氏（現静岡県立静岡工業高校教諭）でした。現在お世話になっている筑波大学蹴球部部長森岡理右先生は私が4年生の時幡ヶ谷に偶然転居して来られ、いろいろ差し入れをして下さいました。また、同僚の山中邦夫先生は4年生の時の1年生という関係でした。

<東京教育大学と亜細亜大学 = 監督>

何はともあれ、そのお世話になった感謝から、卒業後、進路は色々考え（1年間は県立浦和第一女子高等学校で非常勤講師）望みはいくつかありましたが、たまたま卒業後2年目にして小宮先輩が監督を辞めざるを得なくなったことから、サッカー部の監督を引き受けることとなり、自分の生活の糧を得るため、知り合いの紹介で知り合った当時亜細亜大学の教師であった渡辺広治先生の御配慮で亜細亜大学の助手に採用されました。その時の条件が午後2時に幡ヶ谷グラウンドに行って良いというものでした。武蔵境と幡ヶ谷の往復が3年間続きました。その間のキャプテンは現在横浜国立大学教授田村誠氏、トヨタ自動車株式会社トヨタ工業高等学園課長小澤政宏氏、大分トリニティ・ジェネラルマネージャー川野淳次氏でした。現在私の同僚萩原武久先生は川野氏の同級生です。そしてその当時の部長はこれ又以後も大変お世話になった竹内虎士先生と大石三四郎先生でした。この3年間は今考えるとまったく無茶な指導でした。よくぞ皆ついてきてくれたと思わずにはいられません。幸い2部との入れ替え戦もせず、リーグ戦は1年目の3位、2年目は森、釜本氏達がいる天皇杯優勝チームとなった早稲田大学を破る殊勲をあげながら3位、そして3年目は上位チームに勝ちながら、下位チームに敗れ、優勝できたのではないかと思います。3年目が終わった正月、突然当時吉祥寺にあった多和健雄先生の自宅に呼ばれ福島大学に行かないかと言われ、福島大学教育学部の青田峯雄先生からの手紙を見せられ、自分の能力や好みからすると少し迷いはありましたが、教職の道を進むことを決心し、福島大学にお世話になることにしました。この無茶苦茶な指導でありましたがなんとか無難に次の成田十次郎先生に監督のバトンを渡すことができたことを当時の部員はじめ西原湯および幡ヶ谷の

町内会の皆様に対して感謝の気持ちでいっぱいです。

<福島大学とドイツ留学そしてテヘラン>

昭和43年4月福島大学教育学部に赴任しました。福島での10年間は私の第二の故郷にもなった思い出多い年月でした。福島はいうに及ばず東北6県すべての地で講習会の講師、大会の役員、時には選手としても行かせて頂き、多くの方々に良くして頂きました。その上、福島大学ではドイツ留学、テヘランのFIFAコーチングスクールと2度の海外研修を認めて頂きました。特にドイツ留学は私の初めての海外経験で見るもの聞くものすべてが畏敬の念すら覚えるほどの経験でした。ドイツでのS級ライセンスコースでのヘネス・バイスパイラーの実践を踏まえた講義、ヘネフシュポルトシューレでのA級ライセンス、Bライセンスの講習会、また、イングランドに行つてのダラム市で開催されたイングランドの指導者養成コースのプレリミナリー、アワード両コースへの参加、それらの中でも特に記憶に残るのはエキストラとして日本スキー界に多くの影響を残したシュテファン・クルッケンハウザー教授が最後の校長の年であったオーストリア、サン・クリストフのブンデスシーハイムでの3週間のスキー講習会の参加は私のその後のサッカー指導法に大きな影響を及ぼし、財産となりました。このヨーロッパ行きを私に決意させたのは福原黎三先生を共通の恩師と仰ぐ、私の方では勝手に実の弟のように思っている現東海大学教授、サッカー部監督宇野勝氏がいたからです。福原先生は私を浦和高校で教えて次の年、生まれ故郷である広島に戻られました。そして1年間警察学校で教鞭をとられた後、広島大学付属高校へ赴任しました。その年3年生に宇野先生がいました。その年広大付属高校はもともと実力があつたことと福原先生の指導が良かったことが重なつたと思うのですが、見事当時サッカー王国広島の代表となり全国高等学校選手権大会に出場を果たし、堂々3位となっています。私と同じかどうかは定かではありませんが、高校卒業後宇野先生も東京教育大学に進み、そこで私と彼との出会いがありました。私が4年生で彼が新入生でした。その彼が卒業後何年かの教職の後、サッカー先進国であるドイツにサッカーを勉強すべく（日本で最初のドイツのS級ライセンスを取得）行つていたのがきっかけでした。「世界を見る」2人と

もいつも福原先生に言われていたことを何とか実現したいと願っていたことは事実です。ドイツ、イギリスを中心とした半年間の研修と昭和 48 年テヘランで 3 ヶ月の期間で行なわれた FIFA コーチングスクールへの参加、これらの経験が認められてか昭和 49 年から日本サッカー協会の指導者養成の仕事に参加させて頂くようになりました。これらの一連の関係からかと思うのですが、昭和 53 年 2 月 1 日付けで筑波大学体育科学系に配置転換されました。青年時代の 10 年間を過ごした福島大学を出るにあたり多くの先生方から「頑張っていよ」と激励を受けて福島を後にできた幸せは一生忘れることはできません。

< 福島大学から筑波大学へ >

福島大学の教育学部と経済学部の統合移転計画を担当する中で図面を見ながら柱一本分を広げるのに多くの人が討論しあって大変苦労したことと比較すると筑波大学は夢のような広さと条件に恵まれていました。ここで学生時代から教育大監督時代まで大変お世話になった多和健雄先生、大石三四郎先生、今では自分の実の兄より頼りにしている森岡理右先生、また後輩の山中邦夫先生がいらっしゃいました。それに私より 10 ヶ月程後に萩原武久先生が大阪教育大学から来ました。つくばにきた当初はグラウンドから富士山が見えましたが今では樹々も大きくなり信じられない位の変わ

りようです。しかし、私より以前につくばへ来られていた方はもっと数倍の変化と苦労を感じていたとのことです。私事になりますが私の末娘は私が福島からつくばに赴任した二ヵ月後に生まれました。彼女は今高校 3 年生で大学受験に頑張っています。もう直ぐ私が安行の家で過ごした 18 年間と同じ月日がつくばの地で過ぎようとしています。この 17 年間多くの学生、多くの先輩、良き同僚、親しい友人に恵まれました。それに筑波大学蹴球部創部 100 周年という記念すべき時に大学に身をおける幸運に感謝しております。

最後にどんなに感謝してもきれいなのはこれまでの私のサッカー人生で茗溪以外の多くの方々からもこの上ない支援を受けているということです。もし今後私に何かサッカー界に貢献できることがあるのであれば、茗溪は言うに及ばずすべての方面に力を注いでいきたいと念じております。

平成 7 年 11 月 12 日(久しぶりの天皇杯全国大会出場を決めた日)

注) 2005 年 2 月現在 小宮着久先生(順天堂大学名誉教授)今西和男氏(サンフレッチェ広島顧問)杉田基之(静岡サッカークラブ指導者)金村勲氏(モンテデオ山形ジェネラルマネージャー)伊藤庸夫氏(びわこ成漢スポーツ大学教授)竹島住夫氏(ペルーリマ在住)その他多くの方が当時とは変更しています。記載できずご容赦下さい。